



モン・サン・ミッシェル (撮影: 2010年3月22日)

CONTENTS

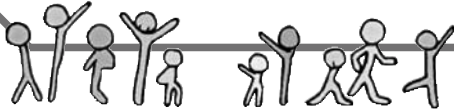
- ◎ **特集：映画**
 - ・『天地創造』をメインに三本立て

国際コミュニケーション学部	田本 健一	2～3
・「静かなる男」(The Quiet Man)を見て	経済学部	葛谷 登
・私の映画遍歴	国際コミュニケーション学部	塚本 鋭司
・情熱的な狂気を求めて	経営学部	関 未玲
・映画でたどるドイツの歴史	文学部	河合まゆみ
・「海は燃えているーイタリア最南端の小さな島」(2016年制作：伊仏共作)を観る	国際コミュニケーション学部	鈴木 秀治
・タイのコメディ映画『ヌー・ヒン』を見て笑って泣こう！	国際コミュニケーション学部	加納 寛
・君はロシア映画『キン・ザ・ザ』に何を感じるか！？	経済学部	清水 伸子
・才能は命を奪いかねない	大学院文学研究科修士課程2年	アンドレア・イフリム
- ◎ **外国語学習etc.**
 - ・中国語勉強体験記 経済学部2年 國島万緒子
 - ・貧しき英語体験学習体験の記 今も昔もー松坂ヒロシ先生の風景ー 経済学部 葛谷 登
 - ・Christmas in Moscow (January 7th, 2017) 法学部 ジョン・ハミルトン
 - ・イタリアでのTesi di laura 法学部 上杉めぐみ
- ◎ ホームページには〇〇がいっぱい！
- ◎ 今号のeラーニング【TOEICテスト演習2000コース】
- ◎ 2016年度(第22回)外国語コンテスト結果報告
- ◎ 豊橋ランゲージセンターに行ってみよう！
- ◎ 豊橋校舎の魅力 ～ Language Café ～
- ◎ 2017年度外国語検定試験奨励金のご案内・編集後記



『天地創造』をメインに三本立て

国際コミュニケーション学部 田本 健一



私たちの世代だと、“三本立て”という言葉を知っていると思います。映画などの興行で、3本の作品を上映・上演することということで、1枚のチケットで映画が3本見られた時代の話です。今回それを試してみたいと思いますが、紙面の都合上、一本をメインとして他の二本は強調したいところに触れるだけということにさせていただきます。

まずは、『天地創造』(The Bible: In the Beginning)です。ジョン・ヒューストン(John Huston)監督、20世紀フォックス社配給、1966年9月28日(アメリカ合衆国)初公開でした。『旧約聖書』の「創世記」の前半部分、第1章の天地創造から第22章のイサクの生け贄までを壮大なスケールで描いた大作です。“初めに神は天と地を創造された。”という一文で始まる天と地の創造は見るものを惹きつける神秘的な演出で始まります。禁断の木の実を食べさせた“蛇”、食べた“イヴ”、叛いた“アダム”を神が叱責し、“土から生まれ土に帰る”と罰を宣告する場面は現実味を帯びた厳格な迫力のある描写に変わります。

ノアの箱舟のシーンはかなり長くとっています。箱舟を作るようにと命じられたノアのおどけ顔が印象的です。ノア一家とすべての種類の動物、鳥、地を這うものの雌雄一対以外はすべて洪水で

流されてしまうという壮大な神のご意思の前で、なすすべがない“土から生まれた者”の中でも神に選ばれたたった一人の人間ノアがおどけ顔で滑稽さを醸し出しているように思われるのです。聖書では、箱舟に乗せられる具体的な動物が分かりませんが、映画では、ゾウ、ラクダ、キリン、トラ、シロクマ、等の動物や空いっぱい飛ぶ様々な鳥がスクリーンに登場します。やがて、雨が降ります。船の入り口がふさがれ、雷鳴が轟き、洪水が始まります。箱舟は洪水に揺れ浮かび、外では逃げ惑うものたちの悲鳴が暴風の音にまぎれてかすかに聞こえます。やがて風、雨がおさまり、放たれたハトが戻ってきます。不敬な者たちに対する神の処罰は終わりました。ノア一家と、選ばれて箱舟に乗った動物たちは、野に戻ってゆきます。

続いて、“バベルの塔”の話です。東に移った人々はシナルの地の平野に住んでいました。人々は同じ言葉を話し、天に届く塔を建設していました。聖書では、神が人々の言葉を乱し互いに言葉が通じないようにしようということを言うと、即そのようになり、言葉が通じなくなった人々は全地に散らばることとなります。映画でもほぼその通りなのですが、付け加えられた演出の一つ紹介しましょう。まず、王様が登場します。“王ほど矢を遠くに飛ばせるものは

なかった”というナレーションが入ります。塔の頂上に立った王は“My bow”と言って弓を受け取り、天に向かって弓を射るのです。矢が空に消えるや否や、“言葉が通じないようにする”という神の言葉とともに突風が起こり、皆違う言葉を話すようになり、大混乱が起こるのです。

続く山場として、アブラム、サライ、ハガルの関係と結末、乱れた風紀のため火焰で滅ぼされるソドムの町のこと、そしてアブラハムが我が子イサクを生贄にしようとして最後は神に止められる話で終わります。

聖書は偉大なる文学作品である、と多くの人が言います。それを映画にしたのが『天地創造』です。他に文学や神話から大なり小なり素材を持ってきた作品を紹介します。先ず、『天空の城ラピュタ』です。“ラピュタ”は、ジョナサン・スウィフト (Jonathan Swift, 1667-1745) の造語、Laputianから採ったものです。名作『ガリヴァー旅行記』(1726)に出てくる飛行する浮島のこと、その住民は数学と音楽に熱中し、自分の仕事を顧みず、空想的な計画に夢中になっている、として紹介されています。ラテン語 ‘lapis’ (石) からの造語だと思います。

最後に、『銀河鉄道999』についてです。この大作は様々な分野の作品、神話などから素材を集めて非常に巧みに作品の中に生かしております。制作者の幅広い見識が伺われます。一例をあげると、“ヴァルキューレ”です。主人公たちは3人のヴァルキューレに追いかけられ、追いつかれます。彼女たちはほっそりとした体型で宇宙服を身に着け、銃を構えて目の前に現れます。ヴァルキューレ (Valkyrie) とは、北欧神話のオーディン神に使えて、戦死した英雄たちの霊をワルハラに導く12人の侍女たちのことです。

作品を作る人たちは、様々なところに素材を求めているのですね。



二三年前だったか、愛知大学豊橋図書館から「静かなる男」のビデオを借り出して鑑賞させていただきました。思いがけなくも、これはアイルランドの美しい風景を満喫できる映画でした。例えば、アイルランドにおける婚姻の慣習が心憎いばかりにきめ細かに描かれてもいます。当時の服装をしたIRAのメンバーが出て来ます。新婚早々のメアリー (Mary) が夫ショーン (Sean) との気持ちの擦れ違いを感に堪えない流れるようなゲール語、すなわちアイルランド語で神父に告白します。そう言えば、アイルランドは漱石の作品「クレイグ先生」の主人公クレイグ氏 (James William Craig) の故郷でもあります。そしてこの映画にはクレイグ先生のお父様と同じくアイルランド聖公会 (Church of Ireland) の司祭も登場しています。見終わってこれはアイルランドの心の奥深いところを教えてくれる映画でもあることが次第に分かって来ました。

この作品は淀川長治『淀川長治映画ベスト1000』(岡田喜一郎編・構成) (河出書房、2009年増補版) の「静かなる男」の項目の「解説」によれば、「ジョン・フォード監督がアイルランドを舞台にアイルランド気質をユーモラスに、繊細に描いた作品。プロボクサーのショーン (ジョン・ウェイン) は故郷イニスクリーに帰り、生家を未亡人から買い戻したので、彼女に惚れている乱暴者デナハー (ヴィクター・マクラグレン) は面白くない。アカデミー監督、撮影賞。」(151頁) というものです。

佐藤忠雄『世界映画史 [上]』(第三文明社、1995年)の第十八章「アメリカの国是の探求＝

西部劇」の「ジョン・フォードと憂国の至情」には、「ジョン・フォード自身はアメリカ生まれであるが、アイルランド系の家の出身である。そして、アイルランド系であることが彼の作品では重要な要素になっている。これらの作品を手がけるたびに、フォードは、自分がアイルランド系であるということの意味をかみしめ直し、アイルランド的な精神はアメリカ的な精神の形成にいかなる形で貢献しているものであるか、という命題を考察しているように見える。」(436頁)とあります。フォードは『静かなる男』という映画を通してアイルランド的なものは何かと問いかけているというわけでしょうか。

映画の字幕だけ見ても、実際に話されている肝心の英語のごくわずかししか聞き取ることが出来ません。わたくしは豊橋の生協書籍部を通じて国際出版社から1953年に出た「英和対訳シナリオ・シリーズ—36—」の清水俊二訳・宮内秀雄註『静かなる男』を入手することが出来ました。これにて実際の会話の内容を詳細に知ることが出来ました。



一読して細部につきいろいろなことを知ることが出来ました。まず 'prohibition' という語が出て来る(32頁)ところから、時代は米国では禁酒時代に当たる頃に設定されていることが分かりました。'parish priest' という語が出て来る(11頁)ところから、ロネガン神父は文脈上、'diocese priest'、すなわち教区司祭であることが分かります。さらに若いポール神父が登場する(31、51頁)ところから、ロネガン神父は主任司祭(pastor)であり、ポール神父は助任司祭(parochial vicar)であることを窺わせます。二人の神父が働く教会は小さくはありません。他方、'Trinity' という語が出て来る(46頁)ところから、プレイフェア牧師はダブリンにある名門トリニティ・カレッジ(Trinity College) —「1952年創立。…長い間、アイルランドにおける英国国教会の子弟の教育の中心であったが、1873年からは宗教上の制約なしに入学が許可されるようになった。」(上野格「トリニティ・カレッジ」平凡社『大百科事典』第10巻、1050頁) — の卒業生であることが分かります。彼は聖公会の司祭としては名誉ある本流を歩んでいた人物と言えるのではないのでしょうか。また 'vicar' という語が出て来る(46頁)ところから、プレイフェア牧師は 'rector' ではないことが分かります。'vicar' の意味はC.O.D.第七版によれば、"incumbent of parish where tithes formerly belonged to chapter or religious house or layman" (p.1295) とあります。十分の一献金がかつて参事会、修道院、俗信徒に割り当てられていた小教区の牧師ということでしょうか。よく分かりません。また "just two or three people at the service" (45頁) という語から、日曜日の礼拝には二三人の信徒が来るほどです。大きな教会とは言えません。

この映画の主人公は元ボクサーのショーン(Sean)、その相手が妻の兄のダナハー(Danaher)です。しかしよくよく見てみると、映画の奥深

いところの主人公は別において、それはカトリックの教区司祭ロネガン (Ronegan) 神父であり、その相手がアイルランド聖公会司祭プレイフェア (Playfair) 牧師ではないかと感ずるに至りました。テーマは和解 (reconciliation) になるのではないのでしょうか。小松弘「フォード」によれば、「フォードの映画における宗教性は、いくつかの映画の中に見られる。」(『岩波キリスト教辞典』、957頁) ということです。「静かなる男」はフォードの映画の中で宗教性のある「いくつかの映画」の一つになるのではないのでしょうか。

「映画パンフ (新世界出版社) 静かなる男」の中の「撮影餘話」によれば、「フォードは…1昨年夏海軍大佐として朝鮮に赴き…テクニカラー映画を発表した。…戦火に追われて南へ逃げて行く民衆の姿に目を向けていたあたりにフォードの面目がうかゞわれた」ということです。朝鮮戦争の悲惨さを目の当たりにして出来上がったのが「静かなる男」だったのです。

ともあれ、アイルランドの歴史のいろはを知らずしてこの映画を味わうことは出来ません。豊橋の書肆で波多野裕造『物語アイルランドの歴史』(中公新書) を買い求めて本文を眺めてみました。後ろに付された「アイルランドの歴史・略年表」から、重要なものを拾ってみますと、1169年には「アングロ・ノルマン連合軍のアイルランド侵入開始」(270頁)、1650年には「クロムウェル軍のアイルランド征服完了」(273頁)、1691年には「リマリック条約でプロテスタントの優位確定」(同頁)、1829年には「カトリック解放令施行」(274頁)、1949年には「アイルランド共和国、正式に成立」(277頁)とあります。

アイルランドは実に800年の間、イングランドの侵入に遭い、その植民地支配下に置かれ虐げられていたことが窺えます。アイルランドで多数を占めるカトリックは18世紀において「…



アイルランド内のプロテスタント・エスタブリッシュメントと、イギリス政府という二重の支配構造の下に置かれていたわけである。」(142頁) という状況でした。この状況は18世紀にとどまるものではなかったでしょう。

プレイフェア牧師の教会の信徒の数の少なさはその間の事情を反映したものでしょう。会衆の数は彼のなせるわざではありません。けれどもプレイフェア牧師は主教が巡回に来て結果しだいによっては異動させられるかも知れないという不安を感じていました。彼は生まれ故郷でもあるその地に留まりたいのです (『静かなる男』、45-46頁)。

そのような事情を知らされたカトリック教会のロネガン神父は巡回に来た聖公会の主教が道を通ったときに、大勢のカトリック信者を道の両脇に並べて、主教がプレイフェア牧師の仕える教会が大勢の信徒で溢れているという印象を受けるように、プロテスタント信徒よろしく主教に歓声を挙げるように呼びかけたのです。ロネガン神父のプレイフェア牧師への粋な計らい

とすべきではないでしょうか。

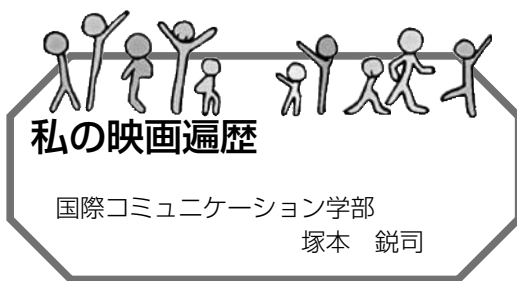
ロネガン神父の言葉を紹介します。

Now when the Reverend Mr. Playfair, good man that he is, comes down, I want ywz all to cheer like protestants. Now, spread out. spread out…

(いいとも、いいとも…。いいかね、プレイフェア牧師はいい人間だよ。いまここへやって来たら、みんな新教徒のように歓声を上げるんだぞ。さあ、散って…散って—54頁)

わたくしはロネガン神父が最後にこの言葉を発することが出来るように、ジョン・フォード監督は飽きさせない筋立てを拵えてこの映画を完成したように思えてならないのです—近ごろ、Maurice Walshの原作を入手。映画と径庭あるを覚ゆ。

付記：カトリック教会の聖職者の名称についてはイエズス会司祭で日本管区長補佐の山岡三治神父様から、アイルランド聖公会の教職者の名称については日本聖公会司祭で1960年代に英国聖公会でご奉仕をされたご経験のおありの垣内茂先生からご教示をいただきました。記して感謝するものです。



映画を観るのが好きになったのは、高校生の時にベルナルト・ベルトリッチ監督の「ラスト・タンゴ・イン・パリ」(1972年)を観てからである。今から思えば、高校生としてはかなりませた映画を観たようだが、この映画は男女のあり方を赤裸々に描写していて、高校生の私にとって衝撃的だった。もう一つ高校生の時に印

象に残っている映画は、宮崎駿監督の「ルパン三世カリオストロの城」(1979年)である。このアニメは物語がおもしろく、アニメ作品として秀逸だと思った。

私が高校生の頃は家の近所に映画館はなく、名古屋駅近くか、もしくは栄へ行かなければならなかった。日曜日の午前中に栄へ行って、二本立ての映画を観るのが、とても贅沢な時間の過ごし方だとその頃思っていた。

大学生となり、東京でのアパート暮らしをするようになると自由な時間が増え、高校生の頃に比べると格段に多くの映画を観るようになった。今はもう無い池袋の文芸坐、銀座の並木座や早稲田のACTミニシアター、京橋にあった東京国立美術館フィルムセンターなどへよく足を運んだものだ。フィルムセンターを除いて、その当時これらの映画館は500円で映画を観ることができた。フィルムセンターはこれらの映画館よりも安く、入場料が100円だった。また浅草の映画館で、オールナイトで5本くらい一気に黒澤明監督の映画を観たことや、文京区本駒込にあった三百人劇場で、大島渚監督の「アジアの曙」(1964年-1965年)という11時間27分のテレビドラマを二日で全部観たのは、今となっては懐かしい思い出である。

私が大学生の時に熱狂していた映画はフランスのジャン＝ルック・ゴダールの作品で、「気狂いピエロ」(1965年)は5回ほど映画館に足を運び、主人公を演じるジャン＝ポール・ベルモンドの破滅的な人生に共感したり、映画に挿入されているアルチュール・ランボーの詩に魅了された。またゴダールの「勝手にしやがれ」(1959年)や「ウイークエンド」(1967年)などもおもしろい作品だと思った。

またゴダールと同じほど好きな映画監督は、ドイツのライナー・ヴェエルナー・ファスビンダーで、彼自身も出演し、最後はホームレスで

のたれ死にする「自由の代償」(1975年)やレズビアンを見事に描いた「ペトロ・フォン・カントの苦い涙」(1972年)はとても印象に残る作品である。

今まで述べた映画監督の他に好きだったのは、スペイン出身で後にメキシコで映画をとるようになったルイス・ブニエル監督である。彼の「忘れられた人々」(1950年)は社会の底辺に住む人々をきちんと描写していて、すばらしい作品だった。また「ブルジョワジーの秘かな愉しみ」(1972年)は、上流階級を皮肉たっぷりに描いた作品でおもしろいし、「小間使の日記」(1964年)は靴についてのフェティシズムが取り上げられていた。

また私に映画の美しさを教えてくれたのは、イタリアのルキノ・ビスコンティー監督で、「地獄に堕ちた勇者ども」(1969年)はナチスの狂気と同性愛をテーマとして扱っていて興味深かった。また「ベニスに死す」(1971年)の原作はトーマス・マンの同名の小説だが、主人公である作曲家の孤独が風景と一体に表現されている。ビスコンティーの貴族である誇りや高貴な精神性が、奥の深い映画を作り出す原動力だったのではないかと思っている。

大学生の時に見た映画はたぶん400本ぐらいだが、スタンリー・キューブリック監督の「時計仕掛けのオレンジ」(1971年)やピーター・ブルック監督の「マルキ・ド・サドの演出のもとにシャラントン精神病院患者たちによって演じられたジャン＝ポール・マラーの迫害と暗殺」(1967年)は、今でも強烈な印象が残っている。今となって後悔するのは、ピーター・ブルックの映画のポスターを自分の部屋の壁に一年くらい貼っていたが、大学を卒業してアパートを出るときに捨ててしまったことだ。

現在大学ではアメリカの文化についても教えているが、私が個人的に好きなアメリカの映画

は、エリッヒ・フォン・シュトロハイム監督の「グリード」(1923年)や、ビリー・ワイルダー監督の「サンセット・ブルバード」(1950年)がある。「グリード」は1849年頃のゴールドラッシュの時に、人々のゴールドやお金に対しての執着心、つまりどん欲さをサイレント映画ながらうまく描いた作品である。また「サンセット・ブルバード」は、サイレント映画時代に有名だった女優が、トーキー映画(俳優の声そのまま映像と一緒に流れる映画)の時代が到来し、過去の名声に執着しながらも落ちぶれていく様子をうまく描いている。その女優の召使いをエリッヒ・フォン・シュトロハイムが演じていて、彼の演技は超一流である。

最後に日本映画について簡単に言及しておこう。日本の映画の中にも多くの傑作がある。大学生の時に観た映画の中で、印象に残っているのは、女性の描写がすばらしい溝口健二監督の「赤線地帯」(1956年)、淡々と日常生活を描きながらどことなく哀愁が漂う小津安二郎監督の「東京物語」(1953年)、男性的な躍動感がすばらしい黒沢明監督の「七人の侍」(1954年)、実験的な手法でゲイの生態を撮った松本俊夫の「薔薇の葬列」(1969年)、死刑制度のあり方や在日朝鮮人への差別問題を扱った大島渚監督の「絞死刑」(1968年)、近松門左衛門の心中物を見事に映画化した篠田正浩監督の「心中天の網島」(1969年)、性と暴力を正面からとらえた若松孝二監督の「壁の中の秘め事」(1965年)などを挙げておきたい。

情熱的な狂気を求めて



経営学部 関 未玲



皆さんは、2016年のカンヌ映画祭で感動を呼んだと言われるスピーチをご存知でしょうか。同年のカヌ最高賞であるパルム・ドール賞を若干27歳という若さで受賞した鬼オグザヴィエ・ドラン監督によるもので、私たちの誰もが気恥ずかしくて胸の奥底にそっと隠しておきたいと思っているナイーブな感情を、ストレートに語ったスピーチです。少し長くなりますがここに引用したいと思います。「登場する人物はときに意地悪く、ときに毒を吐きますが、みな心に傷を負った人たちです。彼らは我々の周りにいる人たち、母や兄弟、姉妹たちの多くがそうであるように、恐怖を感じ、自信を失い、愛されていると確信できないで生きています。[……] 私たちがこの世で求める唯一のことは、愛し、愛されることです。[……] 闘いは続きます。これからも人々に愛される、あるいは嫌われる映画を作るでしょう。それでも、アナトール・フランスが語ったように、“無関心な知恵より、情熱的な狂気の方がいい”のです」(getnews.jp/archives/1470104)。

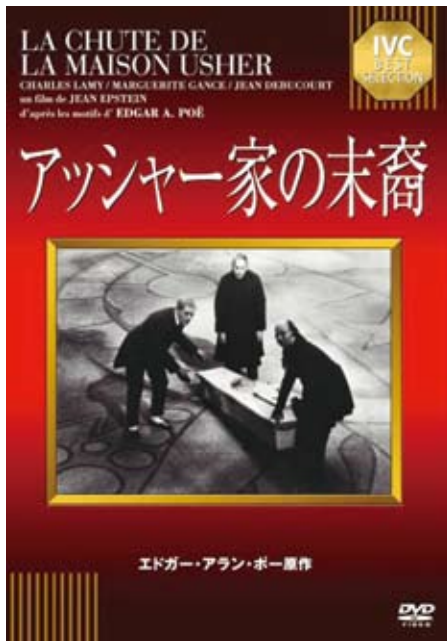
一本一本の作品を発表するたびに、熱狂的な支持ばかりではなく、辛辣な評価に至るまで賛否両論を受け止めてきた監督ならではの、魂の叫びのようにも聞こえる名スピーチです。ドラ

ンのパルム・ドール受賞作品『たかが世界の終わり』は、互いの愛情を上手く表現できずに傷つけ合い、罵声を浴びせてしまう家族の愛憎劇を描いた作品です。12年前に家を飛び出し、今では若手人気作家となった主人公ルイが、死期の近づいたことを知らせるために家族のもとに帰省するごく短い滞在を追った物語です。ドランはカナダの監督ですが、フランス語を公用語とするケベック州出身の監督のため、キャストにフランスの名俳優陣をそろえ、全編フランス語で撮影されています。陰のあるルイ役を演じるギヤスパール・ユリエルの抑えた演技も光るところですが、脇を固めるキャストも個性派ぞろいです。母親役のナタリー・バイの慈悲あふれるエキセントリックなキャラクター、ルイを追い詰める冴えないキレキャラの兄アントワヌ役のヴァンサン・カッセル、その妻を演じるマリオン・コティヤールの心を射抜くかのよう



な眼差し。ドランのようにカンヌ映画祭はこれまで、フランスに限らず各国の名監督を発掘し、世に送り出してきました。そう、フランスは映画を生み、これを愛する、映画大国なのです。

映画の起源は1895年に遡り、リュミーエール兄弟がパリにあるグラン・カフェ内にて試写会を開催したのが誕生の瞬間と考えられています。1900年代には、映画の魔術師と呼ばれたジョルジュ・メリエスが『月世界旅行』を発表しました。マジシャンであったメリエスはトリックを駆使し、世界初のSF作品と言われる本作を作りました。1910年代には小説家が脚本を担当し、国立劇場の俳優陣が出演するフィルム・ダール（芸術映画）が多数作られました。しだいに映像美に重きを置いたジャン・エブシュタインなどの印象派と呼ばれる監督が作品を手掛けるようになります。『アッシャー家の末裔』の幻想的かつ凍てつくような世界観は、今見てもなお圧倒されます。



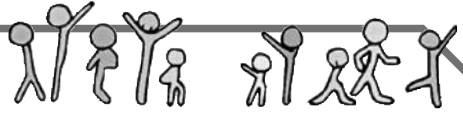
30年代に向けては『アンダルシアの犬』で有名なルイス・ブニュエルが前衛的映画を発表しました。30年代から50年代にかけては詩人ジャック・プレヴェールが脚本を担当し、マルセル・カルネが監督を務めた会話の妙が心に響

く詩的レアリズムを特徴とする作品が次々と誕生します。50年代から70年代には映画雑誌『カイエ・ド・シネマ』の初代編集長アンドレ・バザンを敬愛するフランソワ・トリュフォーやジャン＝リュック・ゴダールなど、カイエ派の監督が活躍しました。彼らは脚本から編集まで自ら映画制作のすべての工程に携わったため、そのスタイルは「作家主義」と呼ばれました。同時期、アラン・レネや女性監督のアニエス・ヴァルダなどの「左岸派」の監督も活躍し、「シネマ・ヴェリテ」と称される即興のインタビューを盛り込んだ作品も作られます。彼らの動きは総じて、ヌーヴェルヴァーグ（新しい波）と名付けられました。70年代から80年代にかけてはフィリップ・ガレルなどが活躍し、自伝的要素の濃い作品を送り出します。90年代にかけては『ボンヌフの恋人』が大ヒットしたレオス・カラックスや後に『タクシー』シリーズを手掛けることになるリュック・ベッソンが次々と作品を発表してゆきました。21世紀にかけてはアルノー・デプレシャンが、軽いタッチで日常の苦悩に迫る作品を手掛けるようになります。

昨今では『最強のふたり』のように移民や貧困の問題を扱った社会派の映画も多く作られ、さらにドランのようにフランス語圏出身監督の活躍も目覚ましいです。このように120年以上もの歴史を誇るフランス映画は、多くの変遷と進化を経て、世界中のシネフィル（映画愛好家）へ、今なお狂おしいほどの情熱を持って映画愛を発信しているのです。



映画でたどるドイツの歴史



文学部 河合 まゆみ

ドイツ映画と聞いて具体的な作品名がすぐに思い浮かぶひとは、よほどの映画通だろう。ドイツ映画は日本ではあまり公開されず、みなさんにとってなじみの薄い存在だといえる。サイレント（無声映画）時代よりドイツが数々の名作映画を世に送り出してきたことを考えれば、これはとても残念なことである。ただ昨今は日本でもドイツ映画がずいぶんDVD化されるようになったので、これを機に、ぜひドイツ映画に親んでもらいたい。といって、おすすめタイトルのただ書き連ねても面白くない。ドイツ映画の名作には歴史映画が多いので、映画でドイツの歴史をたどってみるというのはどうだろうか。

まず紹介するのはプリンセスものである。ドイツ語圏でプリンセスといえば「プリンセス・シシー」、オーストリア・ハンガリー帝国の皇后エリーザベト（愛称シシー）である。彼女は、その自由闊達な美貌を若き皇帝フランツ・ヨーゼフに見初められ、16歳でハプスブルク家皇妃となる。しかしウィーンの堅苦しい宮廷生活になじめず、ヨーロッパ各地を放浪する生涯を送り、1898年、ジュネーヴで客死した。ロミー・シュナイダー演じるシシーの三部作が『エリザベート』トリロジーセットで出ている。次にイケメンのプリンスといえば、ルートヴィヒ2世

であろう。彼は、あのディズニーランドのシンデレラ城のモデルとなったノイシュバンシュタイン城を築いた人物である。19歳でバイエルンの王位についたルートヴィヒは、ヴァーグナーに心酔し、築城のために国費を使い果たした。そのために「狂王」とも呼ばれ、40歳でシュタルンベルク湖で謎の死を遂げた。ちなみに、同性愛者とも伝えられるルートヴィヒが唯一心許した女性が、同じバイエルン王家の出で8歳年上のエリーザベトであったそうだ。映画としては、ルキノ・ヴィスコンティ監督の『ルートヴィヒ』（1972）があまりに有名であるが、ここでは2012年にヴァーグナー生誕200周年を記念して製作された『ルートヴィヒ』をおすすめする。

さてドイツ史といえば、ナチス・ドイツを思い浮かべるひとも多いだろう。戦後のドイツ映画の多くがナチスの歴史と対峙してきたが、ヒトラー個人を描いたものとしては、オリヴァー・ヒルシュピーゲル監督の『ヒトラー最期の12日間』が一押しである。第二次大戦末期、ベルリンの地下要塞のなかでのヒトラーの最期の日々を、秘書ユンゲの証言をもとに描き出した歴史的衝撃作である。ヒトラー本人かと思ふほどの名優ブルーノ・ガンツの力演をご覧いただきたい。また毛色が変わったところでは、最近話題になった『帰ってきたヒト

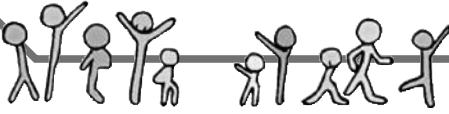
ラー』がある。ヒトラーが現代によみがえり、モノマネ芸人と誤解され、テレビやネットを通じて大衆の心を掴んでいく。ティムール・ヴェルメシュの原作は2012年にドイツで大ベストセラーになり、日本語にも翻訳されているので、こちらを読むのもよいだろう。第二次大戦中、アウシュビッツをはじめとする強制収容所ではユダヤ人の大量虐殺が行われた。アメリカ映画ではこのホロコーストがたびたび取り上げられてきたが、ここではドイツ・オーストリア映画の『ヒトラーの贗札』を紹介する。この映画は、第二次大戦中、強制収容所で極秘裏に偽札を作らせ、連合国の経済を混乱させようとした「ベルンハルト作戦」を描いた実話ものである。手に汗握るスリリングな展開でアカデミー外国語映画賞を受賞している。実は、この時代、ヒトラーに抵抗した、あるいは彼の暗殺を企てたひとたちがドイツにいたことはあまり知られていない。ヒトラー暗殺未遂事件として一番有名なのが、トム・クルーズ主演の映画化でも話題になった「ワルキューレ作戦」である。ドイツでもセバスチャン・コッホ主演で映画『オペレーション・ワルキューレ』になっている。また『ヒトラー暗殺、13分の誤算』では、平凡な家具職人が単独でヒトラー暗殺を試み、すんでのところまで失敗する。さすがマイスターの国ドイツといった感じであるが、この1939年の暗殺が成功していたら世界史は大きく変わっていただろう。さらに大戦末期、筆の力でヒトラーに抵抗しようとしたのがミュンヘン大学生のグループ「白バラ」である。みなさんと同じ年頃の若

者たちが、ナチスを批判するビラを配ったために逮捕され、理不尽な裁判で死刑の判決を受け、その日のうちに斬首された。なかでも女子学生ゾフィー・ショルは、裁判の間も毅然とした態度を崩さず、21歳の短い生涯を閉じた。『白バラの祈り ゾフィー・ショル、最期の日々』では、彼女の誇り高く勇気ある姿が描き出されている。

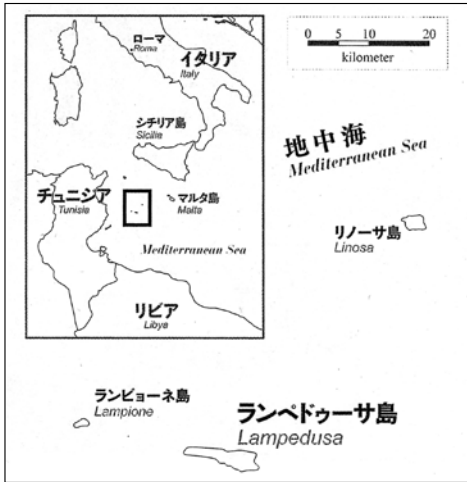
みなさんは1890年のドイツ再統一の後に生まれた世代であるが、かつてドイツは東西に分断されていた時代があった。旧東ドイツのシュタージ（国家保安省）による非人間的な監視社会の恐ろしさを描いたのが『善き人のためのソナタ』で、アカデミー外国語映画賞を受賞した名作である。かつての分断の時代に東西ベルリンを隔てていたのが有名な「ベルリンの壁」であるが、壁を扱った映画としては『トンネル』がおすすめである。壁が築かれた1961年、壁の下を145メートルもトンネルを掘り、東から西へ人々を逃がそうとした、これもなんと実話である。1989年の壁の崩壊については『グッバイ、レーニン！』がいい。東西ドイツ統合を背景に、親子の絆を描いた心温まるヒューマン・コメディで、2003年にドイツで歴代の興行記録を塗り替える大ヒットとなった作品である。

映画を見ることは、語学の学習にも役立つ。上で紹介したDVDを見るときは、日本語吹き替えではなく、ぜひドイツ語の響きも一緒に味わってほしい。

「海は燃えている—イタリア最南端の小さな島」 (2016年制作:伊仏共作) を観る



国際コミュニケーション学部 鈴木 秀治



ランペドゥーサ島の位置

この作品は第66回ベルリン国際映画祭^{金熊}賞を得た映画であり、監督はイタリアとアメリカの国籍を持つジャンフランコ・ロージである。現代世界の抱える困難の象徴である難民・移民を取り上げたドキュメンタリー映画である。舞台は副題にあるようにイタリア最南端にある(イタリアでアフリカに一番近い)ランペドゥーサ島という人口約5500人の小さな島であり、現在年間5万人の難民・移民がやって来る(移住するのではなくて通過するだけである)。

たしかに本作品はドキュメンタリー映画では



少年サムエレと友人

あるが、ストーリー性を持っているのが特徴である。映画は大きく二つの部分に分けられている。一つは12歳の少年サムエレを中心人物とする島民の静かな生活、もう一つはこの島を入り口としてヨーロッパ各国へ移住を希望する難民・移民たちの置かれている苦しいまでの現状(生活といえる状態ではない)である。この二つの世界は基本的に交わることがないが、この二つを結びつける重要な役目を果たしているのが、島にいる唯一の医師であるピエトロ・バルトロロである。本作品の構造をこう説明できるだろう。

サムエレと友達の二人は手作りのパチンコで石を飛ばし、大きなサボテンの葉に穴を開けるシーンがある。サボテンの葉は穴だらけになっている。こういう素朴な遊びしかやらないのかと思うと、日本でいうポケバイ(人が乗って動く超小型のバイク)に乗って公道を走るシーンが続く。けっこう金のかかる遊びもやっているのである。

天気が悪くて漁に出られない漁師の息子のために、マリアおばさんはラジオ局にリクエストの電話をする。頼んだ曲が「FUOCOAMMARE(海の炎)」※である。本映画の題名はこの曲名を取ったもの。つまり、「海は燃えている」は意識であり、直訳なら「海の炎」である。マリアおばさんもDJも顔見知りであり、それほど島の人たちは親密な付き合い方をしていることがわかる。

それでは、この島に来る難民・移民はどう描かれているだろうか。それはまず、夜のシーン



小さな船上の難民たち

で始まる。夜の闇の中で移民たちを乗せた船が沈没しかかっている。でも、それはまず無線のやり取りで幕を開ける。やがて、その移民船に救助艇がやって来て、救助活動が始まる。ランペドゥーサ島に向かうことさえ大きな危険を伴うことがある。

救助された移民たちは難民センターに移動させられる。憔悴した彼らに与えられるのは断熱効果のある銀色に光るアルミのシートだけ、寒いのだろう皆無造作にそれを着込んでいる。その鈍く光る銀色が移民たちの孤立感を示しているように感じられた。

夜になってセンターの中では、アフリカ出身の男たちがラップで自らの苦難を歌うシーンがある。「大勢死んだ、爆撃も受けた」「サハラに逃げ込んで大勢死んだ」「殺され犯され暮らしもたない」、さらにアフリカ出身というだけで馬鹿にされる。ラップのリズムに乗った歌声は同時に彼らの叫び声でもある。作品の中で、とりわけ印象的なシーンである。

バルトロ医師はパソコンのモニターを見ながら、こう説明する。この船に乗っていたのは840人。甲板の上の一等船室は1500ドル、中段の二等船室は1000ドル、最後の船底の三等船室は800ドルである。船から降りろというと次から次へと降りてきて際限がない。こうした人々を救うのが人間の務めだと医師は語る。

船底の三等船室では熱気がこもり喚気も不十

分で水もなく、劣悪な環境のために、ついに脱水症状で何人もの死者まで出てしまう。移民の中でも、貧富の差によって死に至るという苛酷な結末を受ける場合があることが暗示される。

サムエレを中心とした島民の生活に目を向けてみよう。夜明け前に、サムエレは海の近くにある鳥の巣を見に行く。一羽の鳥が木の枝にとまっている。少年が近づいても鳥は逃げていかない。少年と鳥は黙って向かいあっている。まるで、この二つの存在の間に感情が伝わっているかのようなのである。つまり少年と鳥が交感しているシーンである。

最後の場面でDJは今日も島にいる人たちのために音楽をかける。その曲はもちろん「FUOCOAMMARE(海の炎)」である。このテーマミュージックは私たち日本人なら、哀調を込めた曲を使うだろう。ところが、「海の炎」は私たちの予想と異なり、どちらかというとも明るい、これに合わせて踊りたくなるような曲だった。

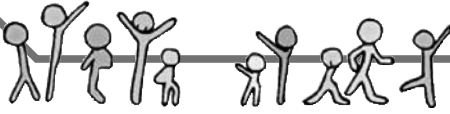
この映画に説明的な映像はない。また、プロテストする場面もない。ただ、観客の想像力を信じているように映画は淡々と進んでゆく。外国人を含めて多くの人にわかってもらいたいという理由で説明的な映画が増えている現在の潮流の中にあって、ジャンフランコ・ロージ監督の潔さが際立っている。

監督は来日に際して、次の言葉を残している。「映画で世界が変わるとは思わない。けれど、きっかけにはなる」。

※第二次世界大戦中、港に停泊していたイタリア軍の船が連合軍に爆撃され、真っ暗闇の深夜なのに海が真っ赤に燃え上がった逸話から生まれた地元の伝統曲。

一般的な注：日本で現在上映中の作品なので、もちろんシナリオもDVDも発売されていないので、映画のパンフレット(2017年2月、ビターズ・エンド発行)を参考にさせてもらった。

タイのコメディ映画『ヌー・ヒン』を見て笑って泣こう！



国際コミュニケーション学部 加納 寛

いま、アジア映画が熱いらしい！ インド(ボリウッド)や香港、台湾、中国、東南アジアの映画など、アジア映画の珠玉の数々が日本の映画館でも上映され、関係の本も数多く出版されている。

当然、タイ映画も熱い！ タイには何しろ3つの季節があって「ホット、ホッター、ホッテスト」らしいから(タイの観光ガイドさんの定番の説明らしい)、熱い(暑い?)のは当然であるが、どうも映画評論などで紹介される映画はハイソな感じで、私としては3秒で寝落ちしてしまうものが多い気がする。「芸術的な映画、ドンと来いザマス」というハイソな方は、『ブンミおじさんの森』(カンヌ国際映画祭パルムドール受賞賞！ なんか知らんけど、すごそう)とかを見て、熱く語り合っておいてください(私は寝てますけど)。

そこでここでは、「映画といえばアクション・コメディ・ホラー！」という、私と同様にハイソでない方々向けにオススメのタイ映画について語ってみたい。

タイ映画は、実は世界的にホラー映画が有名なんだけど、怖いのでパスさせてください、お願いします！ もうすぐ入院して手術を受けなきゃならないんですよ(涙)、ホラー映画について書いたりしたら、病室で思い出しちゃうじゃないですかー！ きゃー、天井のしみがー(絶叫)！

タイ映画といえば歴史映画もヒットが次々と生まれています。歴史学者らしく歴史映画を紹介したいとこだけど、タイの歴史映画はホラー映画に負けず劣らず首がポンポンぶっ飛んだり



映画『ヌー・ヒン』のポスター

するので、パスさせて！ 心静かに入院させてー(涙)！ ちなみに、2010年公開の映画『アユタヤの侍(เจ้าโรอิชัย)』は、山田長政の若き日を描いたという触れ込みの映画で、タイに渡った日本人の山田がムアイ・タイ(タイ式ボクシング)を学んで強くなるという荒唐無稽なお話だけれども、ムアイ・タイの技の美しさが光り、これを見るとムアイ・タイ道場に直行したくなること請け合い！ 入院中の私でさえ、点滴袋をぶらさげたままムアイ・タイ道場入門しちゃうかも。

ということで、ここでは入院中も明るく楽しく思い出せるコメディ映画『ヌー・ヒン、バ

ンコクへ行く (หนูหิน เดอะบุฟี่)』(2006年公開)をオススメさせてください。原作は、1995年から漫画雑誌『マハーサヌック』誌上に登場した漫画『ヌー・ヒン (หนูหิน อินเตอร์)』である。タイ人にとっては貧しい田舎という認識が一般的な、東北地方出身の娘「ヌー・ヒン」(「ヌー」は年少者の人称代名詞で、名前に冠してつけることも多いので、「ヒンちゃん」とでも訳しておこう)が、大都会バンコクに出稼ぎに来て、大金持ちでハイソなお家で住み込みの家政婦さん(本人としては「家事管理人 (ผู้จัดการบ้าน)」と呼んでほしいと思っているが)として奉公するという物語。どこか『おしん』(タイにおいては視聴率80%以上を誇り、タイ人ならたいてい知っている。ドラえもんや一休さんと並ぶ有名な日本人…ってか、ドラえもんは日本人なのか?)を彷彿とさせるセッティングである。しかし、「ヌー・ヒン」はどこまでも明るく前向きで力いっぱい、ただし真面目かといわれるとうなずきがたく、夢見がちでオマヌケなので、カラッと晴れ上がった感じで物語はグイグイ進んでいく。ヌー・ヒンは、持ち前のオッチョコチョイにより、行く先々で大騒動を巻き起こすが、いつも平然と笑い飛ばす鋼の精神力の持ち主である。こんな人ばかりだったら楽しいけど、何を隠そう、私の回りにもヌー・ヒンのような人が多い気がする(尊敬!)

ヌー・ヒンは、愛する奉公先のお嬢さん「ミルクさん」姉妹のために、彼女たちのプロフィールをモデル・コンテストに無断で送ってしまう。美しいミルクさんの登場によって立場が揺らいだトップ・モデルは、悪人にミルクさんを誘拐させ、ヌー・ヒンも田舎の少女たちを強制労働させるブラックな工場に閉じ込められてしまう。ヌー・ヒンやミルクさんはどうになってしまうのか!!

この映画の魅力の一つは、田舎と大都市のギャップからくる笑いだが、そのギャップはタ

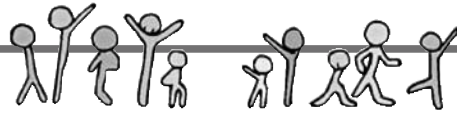
イ語を学んでいると一層きわだつ。ヌー・ヒンたちが話す東北弁とバンコクで話される共通語、そして悲しくも故郷を捨てた人々の話す共通語と方言のギャップには、笑いとともに涙をも誘われる。田舎から騙されてブラック工場に連れてこられた少女たちに対してヌー・ヒンが呼びかける歌には、故郷愛が光って、おぢさんは何だが画面がぼやけてぎでよく見えねえのっす…

ヌー・ヒンは、愛する人たちのためなら、車よりも速く走るし、銃弾をも跳ね返すという、スーパーマンにでも就職した方がよかったんじゃないね?という能力の持ち主。アクションは、『ダイ・ハード』のマクレーン刑事なみ(ドジだけど)。その奇想天外な行動力に、抱腹絶倒まぢがいなし! 思い出だけでも笑える。あ、ヤヴァイ! 思い出し笑いで、開腹した部分が開いちゃうかも!

(後記: 本稿筆者の手術はおかげさまで無事、終了し、退院しました。)



『ヌー・ヒン』出版物の数々



君はロシア映画『キン・ザ・ザ』に何を感じるか!?

経済学部 清水 伸子

1. 『キン・ザ・ザ』¹は【イッチャってる映画】?

『キン・ザ・ザ』(1985年公開)は、観客動員1520万人を達成した、ロシア最強のSFコメディ映画と日本では呼ばれている。2017年春に、日本で初のデジタルリマスターがDVD & BD化され、ネット上に、日本人向けの『キン・ザ・ザ』の映画評論が多くアップされた。

この映画は、マシコフとゲデヴァンという二人のロシア人が、冬のモスクワの街中で裸足でボロ服をまとった異星人と関わり、キン・ザ・ザ星雲にある惑星プリュクに瞬間移動してしまうところから始まり、【異星人に騙されたり、困難に遭遇したりする彼らは、最終的に地球に帰ることができるのか?二人の運命やいかに?!】という話である。

日本の映画批評において『キン・ザ・ザ』に向けられた言葉は、「設定から展開までイッチャってる」に始まり、「ハチャメチャな設定」、「超シュール完全脱力系、ゆる〜い雰囲気とキツチュさに呆然唾然すること請け合い」²、「中央線サブカルチャーに通じる不条理コメディ」³と、完全にイロモノ扱いである。

2. 『キン・ザ・ザ』の中に込められたメタファー

しかし、実は、この映画は単なるイロモノ映画ではない。

その証拠に、『キン・ザ・ザ』のロシア語の評論では、日本でのような「イッチャってる」とか「ゆる〜い雰囲気」といった表現は登場しない。

なぜなら、この『キン・ザ・ザ』は、ロシア人にとって、当時のソビエト体制批判を含んだメタファーがちりばめられている映画でもあるからだ。

(1) エツィロップ(取締官)について

エツィロップ(Эцилопп= etsilopp)は、policeのスペルを逆読みしてネーミングされており、惑星プリュクの警察官的存在である。

ところが、このエツィロップらは、「泥棒だ!早くあいつらを捕まえてくれ!」と訴えると間髪入れずに対価を要求するのである。また、エツィロップは、「泥棒だ!」という訴えでは動かないくせに、「あいつらは、ПЖ⁴に挨拶しなかったぞ、お前の責任問題になるぞ」と言われて泥棒を捕まえるためにやっとな腰を上げ、泥棒が盗ったものを横からネコババし、また、熊の口にはめるような口輪をして嬉しがれという理不尽なことを要求し、嬉々として弱い者いじめをする<警官>なのである。

これは、まさに、ソビエト時代の【強きを助け弱きをくじく】ロシア警察の隠喩である。

(2) ちぐはぐな物々交換

この映画で地球人(マシコフとゲデヴァン)

と異星人の間で行われる物々交換もソ連時代を彷彿とさせる。

異星人たちは「何のためにそれが欲しいの？」
「いや、そもそも、それ何に使うかわかってないよね？なのに、どうして欲しがる？」とツッコミを入れたくなるような物を欲しがる。

しかし、このちぐはぐな物々交換が、物がなかったソビエト時代において、自分に必要か否かに関係なく、手に入るものはとりあえず並んで手に入れていたロシア人の習性を思い出させるのだ。

3. 弱者に寄りそうロシアン・ヒーロー

そして、『キン・ザ・ザ』の地球人マシコフは、ロシアのヒーローの原型であると思う。

彼は何度も騙されながらも、異星人のウエフやビーを見捨てない。常に、惑星プリュクにおいて虐げられている彼らを何とか助けようとし、何度か地球に帰るチャンスも逃す。

ロシアのヒーローは、アメリカン・ヒーローのように、【弱きを助け、強きをくじき】悪い奴をやっつける戦闘的ヒーローではない。ロシアのヒーローは、弱い者に寄り添うヒーローである。『誓いの休暇 (1959)』や『12人の怒れる男たち (ロシア製, 2007)』に登場するのも、弱者に寄り添うヒーローたちである。

なぜなら、エツイロップがいるような社会では、悪い奴を一人残らずやっつけることはできないからだ。下手に歯向かえば、今度は悪い奴らは仲間を連れて倍返しに戻ってくる。身の不運として、淡々と引き受けるしかないということを知っているのだ。

だから、ロシアのヒーローは、アメリカン・

ヒーローのように、映画のラストで宇宙人を殲滅したりしないのだ。

4. 君は『キン・ザ・ザ』に何を感じるか

この『キンザザ』に込められたメタファーもロシアのヒーローの姿も、ソ連時代の社会の様子を知らない日本人には見えてこないものなのかもしれない。

だから、日本の映画評論家たちには、お寺の鐘のようなヘンテコな宇宙船や、【クー】と【キュー】しか喋らない惑星プリュクの住人や⁵、惑星プリュクの身分制度から生じるヘンテコな決まり (①チュトル人より身分の低いパッツ人は鼻に鈴をつけなければならない、②何色のステテコをはいているかで、さらに身分の上下が分かれる、③身分の下の者は、身分の上の者に対して、ヘンテコな格好で【クー】と挨拶をしなければならない、など) といった、思わず脱力してしまうような設定しか目に入らないのだろう。

同時代のアメリカ SF 映画である『スターウォーズ・エピソード5 帝国の逆襲 (1980)』『ターミネーター (1984)』『エイリアン2 (1986)』と比べると (比べちゃいけないのかもしれないが・・・)、日本の DVD 販売会社が、『キン・ザ・ザ』のハチャメチャな設定を売りにするしかないと思えばヤケクソで考えたのも無理からぬと思う。

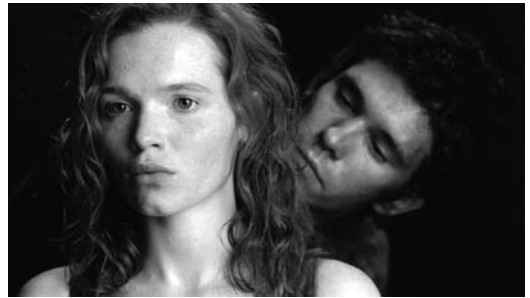
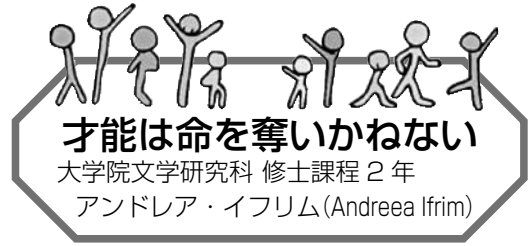
しかし、そうであったとしても、私は、『キン・ザ・ザ』の映画を見た人には、ただの「不条理、オモシロ映画」と片付けて欲しくないのだ。

映画のラストのほうで、エツイロップの辱めにも耐えてきたマシコフが、地球 (=ロシア)

に帰ることができないと分かった時に自殺しようとする場面がある。

地球（＝ロシア）が惑星ブリュクで描かれているような理不尽な社会であるのに、なぜ、地球（＝ロシア）に戻りたがるマシコフが描かれているのか？

『キン・ザ・ザ』には、ロシア人（＝マシコフ）の深い深い祖国ロシアへの愛が込められているとも言えるのだ。



1: 邦題は『不思議惑星キン・ザ・ザ』であるが、ロシア語の題名は《Кин дза дза》なので、ここでは原題にならって『キン・ザ・ザ』と呼ぶこととする。

2: http://tocana.jp/2017/02/post_12353_entry.html

3: 映画監督 松江哲明の映画評論。 <http://realsound.jp/movie/2017/02/post-4096.html>

4: 惑星ブリュクの支配者

5: 外見は地球人と同じで、いかにもという異形の宇宙人は登場しない。【キュー】は文句で【クー】は文句以外の場合に発せられる。登場する異星人たちは、途中からロシア語を喋り始めるが、ある映画評論によると、全編通して【クー】は78回発せられているそうである（数えたのか！（驚））。

皆さん、映画は好きですか？私は大好きです。私は子供の頃からテレビで映画をよく観ていました。その時はホラー映画を沢山観ていました。しかし今の私にとって、ホラー映画は余りにも怖すぎて、観ることが出来ません。

私はアクション映画が大好きで、その中でも特に侍や忍者の格闘シーンが好きです。幼い時に忍者になりたいという夢を持って、武道空手の習い事を始めました。ですが、忍者になるなんてあり得ないことだということに気付くようになりました。それはとても悲しい現実でした。

映画には良いものと悪いものがあります。簡単に忘れてしまう映画がある一方で、永遠に心に残り続けるものもあります。いい映画というのは私達に大きな影響力を持っていて、それらは私達の人生や世界観を一新させる力を持っています。

大人になるにつれて、コメディやミステリー、さらにサスペンスや探偵映画といったジャンルを好むようになりました。私は小説に基づいて作られた映画を観る習慣があります。

残念なことに、大体的場合は映画より本のほうが優れています。けれども、私にとって本よりも優れた映画というのが一つあります。

映画のタイトルは「パフューム ある人殺しの物語」(2006) (Perfume: The story of a murderer) です。主演俳優はベン・ウィショー (Ben Whishaw) とアラン・リックマン (Alan Rickman)、レイチェル・ハード=ウッド (Rachel Hurd-Wood)、ダスティン・ホフマン (Dustin Hoffman) です。この映画は1985年にドイツ人の小説家パトリック・ジュースキント (Patrick Süskind) が書いた小説に基づいて制作されたドイツのスリラー映画です。その映画の舞台は18世紀のパリです。愛されずに育てられた孤児であるジャン=バティスト・グルヌイユ (ベン・ウィショー) は、生まれながらにして超人的な嗅覚を持っていて、ありとあらゆる匂いを識別できる人です。ある日突然、グルヌイユは一人の赤毛の少女の香りに魅了されてしまい、何気なくその女の人を殺してしまいます。彼はパフューマーになりますが、その香りを忘れられないグルヌイユは、それを再現しようとするなかで、やがて殺人に惹かれていきます。私のお気に入りのシーンは、超人的な嗅覚を持つグルヌイユが、自分には体臭が一切ないことに気づ

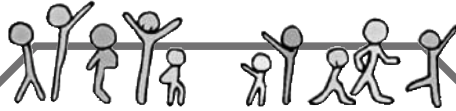
く場面です。

この映画に対する映画評論家の意見は様々です。一般的に、本と映画という媒体を通して、「香り」の意味を明確に伝えることは難問ですが、この映画はそれを可能にしてくれます。この映画の雰囲気、グルヌイユと匂いの複雑な世界を伝えることに成功しています。私は個人的に、この映画の初めから終わりまですっかり夢中になっていました。この映画は何度観ても飽きることがありません。筋書きでは、多くの殺害があるものの、流血のシーンはほとんどありません。これがこの映画を矛盾のあるものにしつつも、素晴らしくしているのです。もう一つ気に入っているのが衣装です。ほとんどの衣装は、私の母国、ルーマニア製だそうです。ウィショーは立派に役柄になりきり、他の誰も彼以上の演技はできなかっただろうと思います。完璧でした！

私は、この映画を観たい人たちのために、ネタバレをしないように努めました。サスペンスやミステリー映画を楽しむ方にお勧めの映画ですが、とてもおもしろくて優れた作品なので、ぜひどなたも「パフューム ある人殺しの物語」を観るようお勧めします。



外国語学習 etc.



中国語勉強体験記

経済学部2年 國島万緒子

私は大学に入って初めて中国語を学びました。中国語といえばニーハオとシェイシェイしか知らず、選択の理由は日本語と似ていて他と比べて易しそうだと思ったからです。しかし、最初の授業で声調やピンインを学び、とても難しいと思いました。そして授業で「音の回路」を作ることが大事だと教わり、私はウォークマンに中国語のCDを入れ何度も聴き、声に出して読みました。次第にテキストのフレーズやセンテンスが頭に残って、ピンインを見ないで漢字に音を乗せて発音する事が出来る様になり、楽しくなってきました。そしてCDを聴く時は、文を短く切って一つの単語を正確な声調で発音しようと心掛けました。

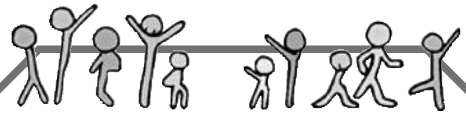
授業にネイティブの先生が来てくださり、生の中国語の力強さや「課」の舌根音、「次」の舌歯音を肌で実感できました。とても綺麗な音だと思いました。また、中国語は思っていたより、高い音だと思いました。そして地域によって、いくつも方言があり、声調も違い、中国の広さ、言葉の難しさを知りました。

大学の外国語コンテストの朗読部門に参加しました。とても緊張しましたが声調を評価して

頂き、三位になり驚きました。賞状を貰えてとても嬉しかったです。そのコンテストで声調が正しく出すことが出来たのは、授業でいつも教わっていた声調の組み合わせ練習のお陰だと思いました。特に四声の後の一声が下がらない様にしたり、文中の「都」の一声もなるべく高く発音する事を気を付けました。声調の練習が本当に大切で、基礎になっていると分かりました。コンテストでいろんな方の流暢な発表を聴けて、とてもいい経験になりました。

中国語の需要は高く、約十四億人の人々と話すことが出来る可能性があると思うと、もう少し話せる様になりたいなと思いました。

中国語を勉強していく中で、中国に親しみが湧きました。謝謝。



貧しき英語学習体験の記

今も昔もー松坂ヒロシ先生の風景ー

経済学部 葛谷 登

昨年2016年12月10日の土曜日に英語の発音指導で定評のある早稲田大学教授の松坂ヒロシ先生が言語学談話会主催の第41回「公開講座『言語』2016《知のミーティング》」に「英語音声学を応用した英語発音指導」という題目でご講演にいらっしゃいました。日本の津々浦々から講演に呼ばれ東奔西走される先生が師走の忙しい時期に名古屋まで来られることはめったにな

いことです。わたくしは1974年、大学一年のとき松坂先生の英語の授業に出席を許されました。わたくしは四十年ぶりに先生のご講義に拝聴する場に出させていただきました。先生の授業は今も昔も同じようにわたくしの心を惹きつけるものでした。

クラス指定の英語のクラスがありました。そのほかに英語の授業を選択せねばならず、抽選で松坂ヒロシ先生の授業を取ることが出来ました(と記憶します)。月曜日の午後の最初の時間、三限目の授業ではなかったかと思います。講義要綱に何が書かれていたのか、覚えていませんが、名前がカタカナで「ヒロシ」とあったのはとても新鮮に思いました。受講生の間で松坂先生は米国の日系人ではないかと想像する者もいました。先生の発音がすばらしかったからであります。

授業は各自ブースで英語を発音し、教員が一人一人の発音を点検出来る環境のLL教室で行われました。授業は二部構成でした。前半は英語のインタビュー等の書き取りでした。後半はW.L.クラーク (William L. Clark) の『アメリカ口語教本』(Spoken American English) (入門用) (Introductory Course) (研究社) の一部を声に出して読むことでした。

教室に初めて登場された松坂先生は太い黒縁の眼鏡をおかけでした。いかにも生氣横溢で、少壮気鋭の教育者というような印象をわたくしは持ちました。ところでご高著『英語音声学入門』(研究社)の奥付の《著者略歴》によれば、松坂先生は1948年の東京生まれで、1972年に早稲田大学をご卒業です。わたくしが大学に入学した年の1974年に東京外国語大学大学院修士課

程を修了になっておられます。先生にとってこの年は大学での教職を始められた記念すべき年にあたります。当時御年26歳といま初めて知って、意外な感を深くします。授業は堂々とし様になっていたからです。

或る日、書き取りの授業で今は亡き國弘正雄先生のライシャワーとの対談の録音の中のライシャワーの発話の部分が用いられました。‘parochial’ というあまり用いられることのない単語が出てまいりました。その語を聞き取ることが出来たことに自信を持って手を挙げ前に出て録音の部分を書いてみました。その後で松坂先生が正確に発言の全体を書き加えてくださり、自分は半分ぐらいしか書けていなかったことを教えられました。

また別の日はブースの中で『アメリカ口語教本』を声に出して読んでいましたら、突然ヘッドフォンから先生のお声が聞こえて来ではありませんか。内容は、その発音は間違っているから、こういうふうに分音しなさいということではなかったかと思います。自分ではどこが間違っているか分かりませんでした。とにかく先生の言われるとおりに分音してみました。しかしわたくしの思いと実際が異なっていたために、もう一度先生の言われたように分音するように言われました。しかしそれでも直りません。途方に暮れていたら、時間切れで助かったような気がします。短い時間でしたが、出口が見えず脂汗が出るような体験でした。

さらにまた別の日には‘our’ という語の発音の仕方が取り上げられました。これを先生は、日本人はこの単語を「アウワ」と発音しているが、それは正しくない、カタカナで書けば「ア

「アウア」が正しい、なぜなら、「アウア」では口の開きが「広・狭・広」となる。しかし ‘our’ という語は発音するとき口の開きが広から狭に移行する、最後のアは最初のアより口の開きが狭い、真ん中の ‘u’ の音は広から狭への移行過程の中で出て来る音なので、これは「ウ」ではなく、「オ」に近い音になる、大略このようなご説明ではなかったかと思えます—これについてはご高著『英語音声学入門』（研究社、1986年、51頁）に解説のあることを最近初めて知りました。

青天の霹靂のようなご説明でした。確かに英語の発音について解説した本はたくさん出ています。そこには個々の音の発音についての詳しい説明は書いてあります。しかし一つの単語を発音する際の一まとまりの音の流れの中でそこに連続する個々の音について解説するというような方法は十八歳の青年はかつて見たことも聞いたこともなかったのです。

音を単発の点としてではなく、連続する線として捉える教えかたは音声を単に空間的に説明するのではなく、時間軸を取り入れてより立体的に説明するものでした。静態的な音声学ではなく、動態的な音声学による説明と言うことが出来るのではないのでしょうか。

ところで昨年、鈴木孝夫・田中克彦『対論 言語学が輝いていた時代』（岩波書店、2008年）を読んでいましたら、第三章「日本人にとっての日本語と英語」の中の「なぜ言語学者は文字論を扱わないのか」という節に、「田中 松坂忠則とか？ 鈴木 そう。音声学の松坂とか、文学者の山本有三とか、あのあたりの人は国語審議会の初めに新聞が『表音派』と言っていた。」

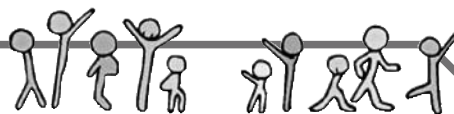
(125頁)とありました。松坂忠則先生が「表音派」であれば、令息の名前をかなでお書きになられるのでは？ 松坂ヒロシ先生のお名前の「ヒロシ」はまさしくそれに当たるようです、松坂忠則先生は松坂先生の父君であられるのではないかと、想像したのです。果たしてそのとおりであったのです。

西尾の書肆より入手した『國字問題の本質』（弘文堂、1942年）によれば、忠則先生は日本語表記において漢字を廃止してカタカナを左から横書きすることをご提唱になられています。松坂先生のカタカナの「ヒロシ」というお名前にはお父様の学問的な良識にもとづく切なる思いが表わされているのではないのでしょうか。ご令息の松坂先生は忠則先生の音に対する人一倍の熱い思いを、形を変えて受け継がれておられるような気が致してまいります。

わたくしは大学時代、高校の英語の教員免許を取得し、某県の採用試験にも合格させていただきました。しかし赴任する前月の三月に入って突然意を翻し、大学院に進む道を目指しました。採用していただいた県の関係者にはどれほど迷惑をかけたか知りません。忸怩たる思いがあります。このことはことあるごとに思い出され、折々に英語の勉強に心を向かわせました。昨年四十年ぶりに松坂先生のご講義に接して、その思いを強く致しました。

しかし若き日に松坂ヒロシ先生の値千金のご講義に接し得、そして四十年後に今一度先生のご講義を拝聴する恵みが与えられ、「神に感謝！」の一言です。十八の時の思いに立ち返って今一度、わずかなりとも前に進むことが出来ればと願うものでございます。

Christmas in Moscow (January 7th, 2017)



法学部 ジョン・ハミルトン (John Hamilton)



Walking around the Kremlin

My sister wanted to go to Moscow this Christmas. We have two family diaries. One was my grandfather's. He visited Moscow in 1910. The other was my mother's. She was in Moscow in 1944/5. The idea of this trip was to follow up these two diaries.

My grandfather was at University College, Oxford and during his first year there became a close friend of Prince Felix Yusupov. During the summer vacation of 1910 he accompanied him to Russia, taking in St Petersburg and Moscow and also the Yusupov palace in the Crimea (at Koreiz near to Yalta). We have his diary. Later Felix Yusupov became famous for his involvement in the assassination of Rasputin in 1916.

My mother worked for the Ministry of Information in the British Embassy in Moscow during the Second World War. She was there at the

time of the Moscow Conference in 1944 where the fate of Greece and Romania was decided (described as the Percentages Agreement). My mother's diary describes her journey on a convoy from Scotland to Archangel, and the time she spent in Moscow, including having tea with Ivy Litvinov (who happened to be British!) and her time with my other grandfather, her father, who came to Russia with the British delegation (he was Member of Parliament for Sevenoaks) during the winter of 1944/45.



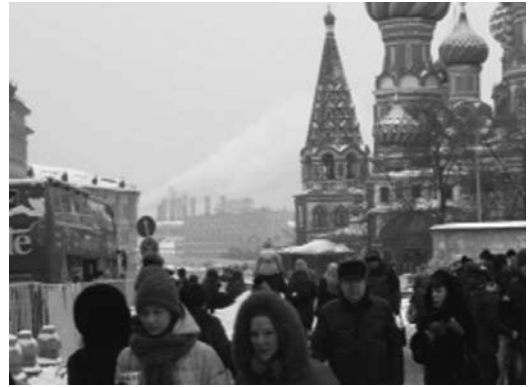
A picture from my mother's photograph album

My brother-in-law booked a very splendid apartment (using Air B&B) - actually sleeping six, we were four - five minutes walk from Red Square in the centre of Moscow (It cost £800 for the week, which divided by four was reasonable, especially as we could cook our own breakfasts and dinners - My sister makes very good soups!) It was up to Oligarch standards! You have to have

accommodation arranged before you can apply for a visa. This was difficult for me to do in Nagoya at short notice because the Russian consulates are in Osaka and Tokyo, so I had to do it in London. My visa arrived by courier I think two days before departure. In my experience Russians can be trusted in such things. My wife brought a very good book about Russia - *Natasha's Dance* by Orlando Figes - which I read whenever I had the chance. I am still reading it.

The four of us met up in Amsterdam - my sister had come from Scotland. Last year they had been to Archangel and the White Sea. From Amsterdam we flew on to Moscow. From the airport (unnecessarily) we took a taxi to камергерский переулок. It is very close to the Prokofiev museum. There was a statue of Сергей Прокофьев in front of it...One of things I enjoyed about this trip was remembering my Russian. I had studied it a little bit at school, so I could read it, but now with the Cyrillic keyboard on my iPad I could type it as well. Most of the letters come from Latin and some of them are from Greek. What I didn't know was that two of them, ш (sh) and ц (ts) come from Hebrew! Many Russians are surprised to hear that. (When I went to my interview at University College, Oxford, I was asked by the Master if I would be willing to read Russian. I said 'Yes'. That was the only question he asked. I didn't read Russian.....possibly Felix Yusupov was at the back of his mind.)

It was very cold in Moscow, averaging about minus 25 degrees during our first five days there. The BBC said that it was the coldest Russian



Saint Basil's Cathedral on Christmas Day

Orthodox Christmas for 120 years. With the snow and the Christmas lights and the crowds of people dressed up in fur coats, the centre of Moscow was very beautiful. The next morning for breakfast we had black bread with Gouda cheese from Amsterdam and delicious Romanian honey. I wanted to get Bashkiri honey but we didn't need it. Outside the windows of the apartment we could see men (and women) roped together, shovelling snow on the roofs. On that first morning we walked around the Kremlin. It was very cold. No wonder Russians dream of the Crimea at this time of year. We walked past the statue of Marshall Zhukov (маршалу Жукову) and into the Red Square where people were skating, past St Basil's....across the river to the British embassy (now residence) . There we talked to the Kalmyk girl on the gate (she looked like a Japanese and was very charming like Japanese.) Apparently the present British ambassador (with beard and sense of humour) ...called Tim Barrow....is to be the Brexit negotiator in Brussels. There was a lot of security in Red Square. We learned that many Chechens are fighting

on the side of Islamic State in Syria and Iraq, which is one of the reasons why Putin supports the Syrian government. Another visit was to the Metropol hotel where my mother lived in 1944. We had cups of coffee in the ballroom there.

During the following days we explored the Moscow Underground. It was warm down there and there was lots of artwork in the underground stations. In Охотный Ряд there were the musicians, and in Маяковская there were mosaic ovals in the ceilings with parachutists jumping out of aeroplanes....in Белорусская the tiles were like Turkish carpets, and in Новослободская there was wonderful stained glass. And in Комсомольская there was 'the girl with the watering can' ... Most of this work was done in the 1930's. It is an amazing collection.

My sister and I went to visit the Yusupov 'hunting lodge' at Archangelskoe (Архангельское) , a minibus ride from the Тушинская underground. Being minus 25 we were the only visitors that day. The park was open, and very beautiful with all the snow on the ground, but the house was closed, but by chance we met the Deputy Director of the park crossing the yard. I said to him ' My grandfather was a great friend of Felix Yusupov at Oxford, and we have come from England.....' He lit up...and went and fetched the key...and opened up the house and showed us round. He had very warm feelings towards the Yusupov family. My grandfather stayed there for a week in 1910.

We went to church on Christmas Eve, to the

Church of the Resurrection (Храм Воскресения) opposite a statue of Rostropovich with his cello. The atmosphere was wonderful with a good choir...incense, icons and beeswax candles. It was -25 degrees outside, but quite close to our apartment. On another day we went to the Tretyakov art gallery with some of the most wonderful icons in the world, especially those painted by Andrei Rublev. From the Tretyakov we walked to the Convent of Martha and Mary (Марфо-Мариинской обители) which we had been told had the most beautiful church in Moscow. (Just at that moment my camera battery needed recharging!)

To my surprise...and we had discovered it in a very haphazard way...the convent had been founded by the Grand Duchess Elizabeth whom my grandfather met with Felix Yusupov in 1910 and wrote about in his diary. She was a grand daughter of Queen Victoria and an elder sister of the Tsarina. Her story is well written up on Wikipedia, and there is too much of it, and she was too special to write about her here. We went to the Conservatoire and listened to a chamber orchestra playing Paganini and Vivaldi. It ended with the theme tune of 'Once



Black Bread for Breakfast with Romanian honey

upon a time in America' (однажды в Америке) . One place we visited, that was a little bit different, was the 'House on the Embankment' (Дом на Набережной) , a block of flats opposite the Kremlin designed by the architect Boris Iofan, and by chance we found a small museum on the ground floor. There were no other visitors and the girl spoke English. Khrushchev had lived there, and Zhukov, and members of Stalin's family, Svetlana Alliluyeva etc.....During the purges in 1937/8 some 600 of the 2500 people who lived there were sent to the Gulag...there was a list of their names.

During the week we met some very nice people we had not met before. There was OLGA who pointed us towards the Church of the Resurrection on Christmas Eve, and told us how to get to Archangelskoe. There was the GIRL in the House on the Embankment who answered all our questions there. There was Vladimir who opened up the house at Archangelskoe for us. There was D.C.WEST (not his real name!) , who has been an oil and gas contracts lawyer in Moscow for 30 years. He told us about Sevastopol and the Crimea - he had been there, and about the sanctions and the CEO of EXXON who then was likely to become the new American Secretary of State and did...Rex Tillerson ...who we will hear a lot more of from now. DCW spoke well of him and I hope he is right. DCW helped us to buy tickets for the Conservatoire. He had written an article about Russia's western frontier with the title 'The Treaty of Brest Litovsk' in Moscow Life. ...And there was the KALMYK GIRL at the embassy (whose children played

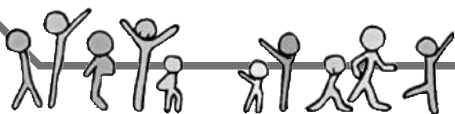
chess...she didn't...The Kalmyk Republic just north of the Caspian has been called the world's chess capital. 280,000 people live there and their religion is Buddhism... It is the only Buddhist country in Europe!) And there was a DRUNK in the cafe near the Conservatoire who reminded me of Yevgeny Yevtushenko who, a long time ago, I had heard reading his poetry in Collets Bookshop in London...he was a real Russian...both of them were.

So for all four of us this was a very good expedition. Thank you to my sister and her husband Rufus for dragging us yonder. I like the Russians with their huge country with its vast tracts and diverse peoples, not to forget that part of Russia out beyond the Urals all the way to Japan...A friend told me that if you take the oil and gas and the armaments industry out of the Russian economy, the GNP is about the same as that of South Korea. I don't know if that is true! Anyway, clearly to me there are lots of splendid and excellent Russian people past, present and future. Clearly some dreadful things have happened there! ...But we enjoyed that week in Moscow very much.



Skating on Red Square

イタリアでの Tesi di laurea



法学部 上杉めぐみ

イタリア消費者法（迷惑電話規制法の改正）に関する意見を交換するために、3月18日、ヴェネツィア（ヴェニス）にあるUniversite Ca' foscari（以下「カ・フォスカリ大学」と表記する。）を訪れた。その際、カ・フォスカリ大学の准教授Sara De Vido氏のご好意により、イタリアの卒業審査に相当するTesi di laurea（英語でいうfinal dissertation）を見学させていただいた。非常に興味深い体験だったので、ここで紹介したいと思う。なお、詳細については、Sara氏が回答してくれた。彼女には、この場をもってお礼を申し上げたい。

1. Tesi di laureaとは？

Tesi di laureaとは、学部生の卒業審査のことをいう。卒業審査は1週間行われ、通常、1日あたり、6、7人の学生が受験することになる。今回見学させてもらった国際比較関係（法律・経済）学科では、例年の受験者数は40名程度だが、今年は60名の学生が受験していた。

まず驚かされたのは、口頭試問を行った場所である。大学の一教室であったが、まるで美術館のような装飾で、シャンデリアや天井画の豪華さに目をみはり、単なる観覧者であったはずなのに、その場にいるということだけで非常に緊張した。

次に驚いたのは、日本の修士課程等の口頭試問は、通常、受験者本人と大学教官4、5人で行われるものだが、イタリアの大学では、受験者

が、両親や友人を連れてくることができるという点である。多い時には1人の受験者に伴って20人程度の友人が同席していることもある。そのため、受験者が10人程度であっても、教室には、椅子が150脚程度準備されていた。そして、学内には花売りが歩いていたり、街中で紙吹雪が舞ってるという状況で、一種のお祭りのようであった。なぜ、こうした盛り上がりになっているのか尋ねたところ、イタリアでは大学卒業者の割合が入学者の20%前後と非常に低く、また、日本やイギリスなどのように、みんなで一緒に卒業するのと異なり、イタリアでは、年3回卒業試験が行われ、五月雨式に卒業していく



ことになるため、卒業については、親族、友人一同が盛大にお祝いするのが慣例であると説明されていた。なお、日本で卒業できなかった場合、授業料を前期ないし通年分支払うことになるが、イタリアでの場合、在籍登録をしないおしなうえで、2000から2500ユーロの学費（1年分）を支払わなければならない。そして、長くて、10年かかって卒業する場合もあるということを知った。

2. 卒業審査の内容

卒業審査は、学生が執筆した卒業論文に基づき、受験者1人について、20分程度口頭試問が行われ、10分程度面接官が審議する。面接官が審議している間、受験者及び同伴者は全員がいったん教室から退室し、審議後、再度受験者達が教室に入り、合否を告げられ、その場で卒業が決まる。10人いたら10回これを繰り返す。

口頭試問では、はじめの約10分が学生のプレゼンテーションの時間として与えられており、受験生のほとんどがパソコンを用いて、事前に準備してきたスライドとともに、自分の論文の内容について説明していた。見学させてもらった国際関係比較学科では、特に法律の場合、国際法（主にEU法）が国内法レベルでどのように実施されているかというテーマを取り上げて卒業論文を書いているとのことであった。そして、同学科の学生は、口頭試問も、2か国語で行わなければならないという条件がついている。通常は、英語とイタリア語で対応するが、仮に、アジアやロシア等のテーマを選択した場合、その言語を用いなければならない。

申請された論文は、大学内のネットワークに論文が掲載されているので、教授はいつでもチェックすることができる。私が見学したとき

は、8名の教授が面接官となっていたが、主査と副査が全編通して審査をすることになり、それ以外の面接に参加する教官は、単純にコピーアンドペーストのみのチェックを行うことになる。主査は、何について論じているか、正しい情報源を用いているか、法的根拠は適切か、コピーアンドペーストはされていないかという点について、とても注意深く確認をしている。もし、先の項目について正しくない場合には、審査を通さず、そもそも担当教官が最終審査への申請を認めない場合もあるという。

3. 卒業後の進路状況

受験者の主な進路は、EUにおける組織、国際的NGOへの所属、または、海外の大学への留学だという。イタリアでは景気が悪く、就職先を見つけることは不可能なので、経験を積んでから就職していくということが通常の流れだと説明された。なお、私のゼミ生のほとんどが卒業後すぐに終身雇用で働くことを、イタリア、イギリス、韓国の大学教員に話したところ、とても優秀な学生ばかりなのねと驚かれた。経済状況や雇用制度が異なるので一概に比較できないが、どの学生も激しい競争のなかで過ごしているようだ。今回の経験を通して、私も改めて気を引き締めて、研究・教育に携わりたいと感じた。



ホームページには〇〇がいっぱい！

みなさんは、語学教育研究室に公式ホームページがあることを知っていますか？こんな感じのふんわりとした雰囲気です。



けれど、内容は充実していますよ。まさにこの瞬間読んでいる、この『Lingua』。専用ページでバックナンバーを読めるほか、Linguaの前身である『Goken ニュース（名古屋語学教育研究室発行）』と『LL ニュース（豊橋語学教育研究室発行）』も読むことができます。

また、入学後に合格した外国語検定試験で当研究室の基準を満たしていれば奨励金が受け取れる「外国語検定試験奨励金制度」（裏表紙参照）、名古屋校舎の伝統行事「外国語コンテスト」、豊橋校舎独自開催の「Language Café」（35 ページ参照）など、知って損はない情報を得ることができます。

特に 30 ページで紹介している「英語・中国語 e ラーニング」は、非常に役立つ Web 学習教材です。まだ試したことのない人は、ぜひ 1 度ログインしてみてください。

ホームページの詳細は、下記 URL もしくは、検索サイトで **愛大 語研** とググってみてください。
語学教育研究室公式ホームページ <http://taweb.aichi-u.ac.jp/tgoken/index.html>



今号のeラーニング【TOEICテスト演習2000コース】

～ TOEIC 本試験だけではなく、TOEIC IP 試験対策にも有効な学習コース～

特 徴

- TOEIC 本試験と同形式の問題を各 2000 問収録。
- 学習時間と目標に合わせてテスト選択が可能。
テスト 200…2 時間／テスト 100…1 時間／
テスト 50…30 分
※本試験の直前には「テスト 200」学習を推奨
- リスニングとリーディングには制限時間が設定され時間内に解ききる術を養成。
- 丁寧な解説機能により、間違えた箇所を徹底分析。
同じ間違いを繰り返させない。



【①リスニング】

1 問あたりの回答時間は 5 秒。
素早い聴解力と推測力を鍛える。

【②リーディング】

回答時間はセクション全体で 19 分。
※テスト 50 の場合
最後まで解ききる術を修得する。

【解答結果】

解説には、今後同じミスをせず、正解へと導くためのポイントが満載。
本試験での目安スコア換算機能つき。

50問中 19問正解
目安点 380点



こんな方におススメ



- TOEIC を初めて受ける方で、どのような勉強を行えばいいのかわかりたい。
- 模擬試験を数多くこなし、実力をつけたい。
- 出題傾向の把握と上手な時間配分を組み立てたい。

学習内容

- ① テスト 200……………10 ユニット
- ② テスト 100……………20 ユニット
- ③ テスト 50……………40 ユニット

eラーニング（英語・中国語 eラーニング）は、今号で紹介している「TOEIC テスト演習 2000 コース」以外にも下記の 5 コースがあり、学習者個人のレベルや目標などに合わせて自由に学習することが可能です。ぜひ授業の補助教材や英語力、中国語力向上に取り入れてください。

- スーパースタンドコース ○ スタンドコース ○ 初中級コース プラス
- PowerWords コース プラス ○ 中国語コース

アクセスも簡単で、Web 環境が整った場所およびパソコンから 24 時間好きな時にログインができるので、隙間時間を有効活用できます。

アクセス方法についての詳細は、当研究室公式ホームページをご覧ください。(URL : <http://taweb.aichi-u.ac.jp/tgoken/>)

2016年度（第22回） 外国語コンテスト結果報告

去る2016年11月に恒例の外国語コンテストが開催されました。第22回を迎えたコンテストも多く、多くの学生たちが参加し、朗読、暗誦、自由作文スピーチ、歌など、多様な種目でそれぞれの力を発揮してくれました。結果は以下の通りです。

英語

開催日時：2016年11月17日(木) 14:00～

参加者総数：7名

課題：自作スピーチ

入賞者：

- 1位 現代中国学部4年 岸 里佳
“My Wish : Feel Closer to the Religion”
2位 国際コミュニケーション学部3年 川上 友維
3位 現代中国学部3年 細野 美妃

ドイツ語

開催日時：2016年11月21日(火) 18:10～

参加者総数：18名

課題：朗読

入賞者：

- 1位 国際コミュニケーション学部3年 上田 真菜
2位 国際コミュニケーション学部3年 都築 千佳
3位 国際コミュニケーション学部3年 牧野有加里

フランス語

開催日時：2016年11月17日(木) 12:30～

参加者総数：13名

課題：朗読

入賞者：

- 1位 国際コミュニケーション学部2年 伊藤ナツミ
2位 国際コミュニケーション学部1年 葉柴優理恵
3位 国際コミュニケーション学部4年 竹川 真未

中国語

①対象学部：法学部・経営学部・経済学部・
国際コミュニケーション学部生

開催日時：2016年11月17日(木) 11:00～

参加者総数：22名

課題：朗読

入賞者：

- 1位 国際コミュニケーション学部4年 伴野 花恋
2位 法学部2年 後藤 健斗
3位 経済学部1年 國島万緒子

②対象学部：現代中国学部生

開催日時：2016年11月24日(木) 14:00～

参加者総数：13名

課題：暗唱／自由

入賞者：

(課題部門)

- 1位 現代中国学部1年 竹内 友海
2位 現代中国学部1年 山下 謙一

(自由作文部門)

- 1位 現代中国学部2年 青島 健悟
2位 現代中国学部4年 本竹紗和子

ロシア語

開催日時：2016年11月22日(火) 16:30～

参加者総数：23名

課題：朗読／歌唱

入賞者：

- | | | |
|----|--------|-------|
| 1位 | 経営学部1年 | 戸田 誠大 |
| 2位 | 経営学部1年 | 後藤 詩紋 |
| | 経営学部1年 | 岡田 大 |
| 3位 | 法学部1年 | 伊藤 陸生 |
| | 経営学部1年 | 大石 悠登 |
| | 法学部1年 | 迫田 朋也 |

韓国・朝鮮語

開催日時：2016年11月21日(火) 16:30～

参加者総数：35名

課題：暗唱／自由

入賞者：

- | | | |
|----|--------|-------|
| 1位 | 法学部2年 | 村田 優 |
| 2位 | 経営学部2年 | 小林 拓海 |
| 3位 | 法学部4年 | 山田 和音 |

タイ語

開催日時：2016年11月22日(火) 16:30～

参加者総数：36名

課題：朗読／歌唱

入賞者：

- | | | |
|----|--------|-------|
| 1位 | 経営学部1年 | 原口 楓 |
| 2位 | 経営学部1年 | 田中 茉帆 |
| 3位 | 経営学部1年 | 田中 優衣 |

日本語

開催日時：2016年11月22日(火) 12:30～

参加者総数：11名

課題：自作スピーチ

入賞者：

- | | | |
|----|-----------------------|---------|
| 1位 | 国際コミュニケーション学部 (協定留学生) | 孫 瑤 |
| | | 「日本の助成」 |
| 2位 | 国際コミュニケーション学部 (協定留学生) | 丁 麗琨 |
| 3位 | 国際コミュニケーション学部 (協定留学生) | 盛 玲欢 |



豊橋ランゲージセンターに行ってみよう!

1. 豊橋校舎 ランゲージセンター

ランゲージセンターは、学生のみなさんの外国語学習を応援している場所です。

大学で初めて学ぶ外国語、すでに学んでいる外国語をさらにレベルアップさせたい、外国語検定試験の対策を行いたいなど、様々な目的に合わせた外国語関係の資料を約1万800点所蔵しています。

各外国語の所蔵点数はこちらです。

言語	所蔵数	言語	所蔵数
英語	3,031	日本語(留学生用)	1,072
中国語	1,583	ポルトガル語	66
フランス語	1,019	その他の言語	1,409
ドイツ語	1,029	NHK語学講座	15
ロシア語	1,012	外国語雑誌	5
韓国・朝鮮語	583	英字新聞	2

資料の中には、各外国語の専任教員や私達スタッフがおすすめする資料や、話題の映画DVDや検定試験問題集など、みなさんの学習に役立つものが見つかると思います。

LLメディアルーム、シアタールームなどの充実した設備をはじめ、資料の貸出制度もあります。在学中どんどん活用してください。



【ランゲージセンター】

当センターを利用している学生の声をご紹介します。(一部抜粋)

☆たくさんのDVDや資料がそろっているので、学習に必要な資料を探したり、映画鑑賞を楽しんだりできる。(文学部3年)

☆さまざまな国の映画作品を、その国の特色を感じながら観ることができるのが良いところだと思う。(地域政策3年)

☆検定のテキストも貸し出してくれる。(短大2年)

☆海外のDVDを見てみると、価値観や環境の違いを感じることができる。海外で働きたい人や、英語に興味がある人にはお勧めの場所だ。(文学部1年)

2. 英語・中国語 e-ラーニング(アルク)

パソコンで英語・中国語を学ぶWeb学習システムです。ネット環境が整っていれば、24時間いつでも無料(※在学中のみ)で利用することができます。英語5コースと中国語1コースがあります。

リスニング力とリーディング力をバランスよく高めたい、語彙力を重点的に強化したい、TOEICの試験対策や高得点を目指すなど、目的に特化したコースで効率のよい勉強ができます。

ランゲージセンターにもパソコンを3台備えています。授業の空き時間などを利用して、eラーニングを勉強することができます。ぜひ利用してください。

3. Language Café

ネイティブスピーカーの教員とアットホームな雰囲気外国語を学ぶのがCaféです。お昼休みはランチをしながら、夕方は様々なアクティビティを交えながら話すので、自然とコミュニケーション力が身につく、語学力も高まっています。学部・学年を超えた交流も広がっています。

開催日時は次の通りです。ぜひ気軽にお越しください。

言語	昼休 (12:40~13:15)	夕方 (16:40~適宜)
English Café	月・火・水・金	月・水・金
中文茶座	火	
Café Français	金	火 (※隔週金は CINÉ CAFÉ)

Language Café 参加者の声をご紹介します。
(一部抜粋)

～ English Café ～

☆ネイティブの先生方と話し、スピーキング力を伸ばすことができ、日常会話から文化の違いを学ぶことができます。

(文学部3年)

☆ネイティブの先生方と実践に近い形で会話ができるのが魅力的。実際の会話で使える表現が学べて、語学力の向上に役立っている。(地域政策1年)

☆たくさんの友達ができました！価値観が違う人と話すのはとても刺激になります。

(文学部1年)

☆初めて来る時は緊張するけど、来てしまえば、新しい友達がたくさんできます。完璧な英語でなくても話す努力をすれば、力がつくと思います。(文学部1年)

☆最初は不安でしたが、一度参加して友達ができ、参加するのが楽しくなりました。普段使わない英語をつかえるので、とても勉強になります。(地域政策1年)

～ Café Français ～

☆落ち着いた雰囲気の中で気楽に言語に触れることができる。(文学部2年)

☆授業以外で先生に質問する機会が得られるのがとてもうれしいです。(文学部2年)

☆ネイティブの先生と交流を深められる良い場所です。(文学部4年)

～ 中文茶座 ～

☆普段は話す機会がないようなネイティブの先生と話すことができるので、仲良くなれるし、会話力の向上にもつながります。(文学部2年)

☆私達が知らない中国文化を知ることができ中国語の授業も楽しくなります。
(文学部1年)



【Language Café in 2017】

豊橋校舎の魅力～ Language Café ～

豊橋校舎では、ネイティブスピーカーの教員と授業枠を超えた自由な空間で、内容にこだわらない自由な会話やゲーム、アクティビティを楽しみながら、外国語のコミュニケーション能力を自然に向上させる Café を開催しています。(開催日程および会場は下表参照)

各 café の教員からもメッセージが届いています。教員との交流以外にも学部学年を超えた交流の輪も広がっているこの Café へぜひ参加してください。



【English Café】

The Language Café is a great place to relax, meet your friends, eat lunch and communicate in English. You can chat with your teachers, or there are books and manga in English for you to read and games for you to play. Plus, of course, there are hot and cold drinks – for free! See you there!

【Café Français】

Le mardi soir et le vendredi à midi, venez participer au Café Français et parler français !

À très bientôt !!

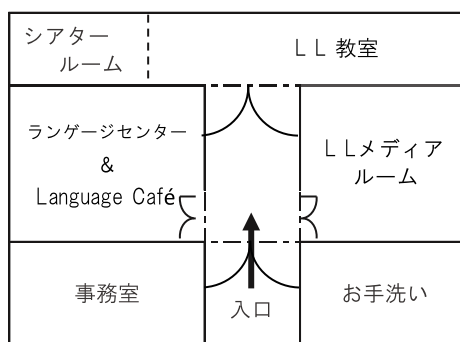
【中文茶座】

你喜欢学习汉语吗？你想提高自己的汉语会话能力吗？你想解决学习汉语中的难题吗？那么，请来参加每星期二中午的汉语茶座吧。从十二点半开始，五十分钟的时间，在汉语老师的指导下，大家一边吃饭喝茶，一边用汉语聊天，想说什么都可以，还可以请教老师各种问题。轻松愉快的氛围，相信你会喜欢，并从中受益。汉语茶座，欢迎你！

【開催日程】

	昼休み (12:40～13:15)	夕方 (16:40～)
English	月・火・水・金	月・水・金
中文	火	—
Français	金	火 (隔週金に CINÉ CAFÉ 開催)

【開催場所】



2017年度 外国語検定試験奨励金のご案内

言語	名古屋校舎		豊橋校舎	
	試験名称	基準	試験名称	基準
英語	実用英語技能検定(英検)	準1級以上	実用英語技能検定(英検)	2級以上
	TOEIC	650点以上	TOEIC	530点以上
	TOEIC S/W	130点以上	TOEIC IP	①750点以上 ②前年比100点以上
	TOEFL iBT	50点以上	TOEFL iBT	50点以上
	IELTS	4以上		
	国際連合公用語英語検定(国連英検)	B級以上		
	ビジネス通訳検定(TOBIS)	3級以上		
	日商ビジネス英語検定	3級以上		
	通訳案内士(通訳ガイド)	合格		
ドイツ語	ドイツ語技能検定(独検)	4級以上	ドイツ語技能検定(独検)	4級以上
フランス語	実用フランス語技能検定(仏検)	4級以上	実用フランス語技能検定(仏検)	4級以上
	DELFS・DALF	A1以上	DELFS・DALF	A1以上
	TCF	100点以上	TCF	100点以上
中国語	中国語検定	4級以上	中国語検定	4級以上
	新HSK	3級以上	新HSK	3級以上
ロシア語	ロシア語能力検定	4級以上	ロシア語能力検定	4級以上
韓国・朝鮮語	ハングル能力検定	4級以上	ハングル能力検定	4級以上
	韓国語能力	2級以上	韓国語能力	2級以上
タイ語	実用タイ語検定	3級以上		
日本語	日本語能力(JLPT)	N1級	日本語能力(JLPT)	N1級
	BJTビジネス日本語能力テスト	460点以上	BJTビジネス日本語能力テスト	460点以上

☆中国語は現代中国学部を除きます

受付期間 名古屋校舎 2018年1月31日まで

豊橋校舎 2018年2月21日まで

詳細は所属校舎の語学教育研究室にて確認してください。

奨励対象者 学部学生・短大生(協定留学生・大学院生・オープンカレッジ生等は除きます)



〈編集後記〉

第10号は皆さんが楽しめる企画として「映画」を特集しました。外国映画は外国語会話の勉強に役立ちます。また、外国文化を知るためのメディアとしても重要です。今回先生方から寄せられた文章は、学生諸君ではなかなか気が付かない映画の見方を教えてください。でも、紹介された映画は「お堅い」映画ばかりではありません。タイのコメディ映画『ヌー・ヒン』は漫画が原作ですし、ロシアの『キン・ザ・ザ』も荒唐無稽なSF映画と呼ばれています。でも、前者には田舎と大都市のギャップが前提にあり、後者には当時のソビエト体制への批判がこめられています。こんな見方を知れば、映画の世界が広がること請合^{うけあ}い。未見の映画をぜひ見に行きましょう。(H.S.)